人間の道

――聖書入門――

松下 昌義

途　上　社

人間の道 ―聖書入門―

昭和52年10月31日

著　者　松下昌義
発行所　途上社
京都市左京区下鴨南茶の木町29

頒価 1,000円

まえがき

「人間の道」。これは左京教会が毎週日曜礼拝の集いのために出す週報誌上に、「今週の聖書の言葉」と題して記した短い文章をまとめたものです。

本来このようにまとめるつもりはなかったのですが、読んで下さる方々から一冊にしてみては、という要望もあり、それに応えて、ここに出すことにしました。

短い文章でもって、イエス様のこと、聖書のこと、信仰のことなどを、どなたにもわかりやすく、しかも気がるに読んでいただきたいという願いで毎週記したものです。

思うに聖書は理屈の書物でなく、私たち人間がその一生を幸いに生活して行くためには、どのような心得でもって日々をすごせばよいのか、どう生きれば安心して死んで行けるのか、といったことなどを、イエス様やそのお弟子さんたちの言行体験を示し語ることにより、私たちに人生のまことの知慧を与えようとした書物であります。

とは申せ、そのような聖書の言葉を私が如き無明な者が説き語ることにより、かえって

損ないはしまいかという一抹の危惧をいだきつつ、ここに一冊にまとめました。

大方の知慧を仰ぐ次第であります。

昭和五十二年　十　月　三十一日

松　下　昌　義

1

「わたしが来たのは、失われたものを
たづね出して　救うためである」
（ルカ福音書19章20節）

これはイエスの言葉です。「失われたもの」とは、間違った位置にいるもの、という意味で、実は私たちのことを指しているのです。

人間としての私たちが、最も落ち着けて幸いで居るためには、人間としての在るべきところに在るときです。

私たちはだれしも、相互に気ごころをよく知り合った友だちや家族らといるときは、安心して落ちついていられます。何故でしょうか。それは相互に信頼し、相互に愛を感じているからです。

実は、この相互に信頼し、相互に愛を感じている人間の交わりの中にいることこそが、先述の、最も落ちつけて幸いで居られる人間としての在るべきところに在る、ということなのであります。

信頼・愛・理解、これらは、おきまりの言葉のように思いますが、私たちが人間として、人間らしく在るためには、最も重要なことがらなのです。

私たちが、相互の関わり、交わりの中に信頼や理解や愛を失っていたら、私たちは人間としての在るべきところから落ちて人間であることを失ってしまっている、と申せます。それは人間にとって自然な在り方ではなく不自然な在り方です。ですから人は、そこで不安を覚えたり落ちつかなかったり、悲しさを感じるのです。

イエスは、この間違った位置にいる私たちを救い出し、人間らしい自然をとりもどさせ、落ちついた幸いなる人間関係をつくり、うみ出し得る人間の在るべきところに在らしめようとされるのであります。

（50・11・2）

2

「娘よ、しっかりしなさい。あなたの信仰が、あなたを救ったのです」

（マタイ福音書9章22節）

不治の病をもつ娘が、イエスの衣にでもさわりさえすれば、なおしていただけるだろう。と信じ、おそるおそるイエスのうしろから、衣にさわった時、イエスは、それに気づいて振り向き、娘を見て言われた言葉が、表記の言葉です。

このイエスの言葉は、みじかいものですが娘に対する深い思いやりとはげましとのやさしさを感じさせます。

信仰とは、第一にまことをもって求めることです。娘は、イエスのみ衣にでもさわりさえすれば自分の求めているものが得られると信じ、イエスに近づき、み衣のふさにさわりました。何といじらしい求め方でしょう。娘にとって、それは、せいいっぱいの求め方でありました。

イエスは、それが娘のせいいっぱいの求めであることを、よく知っておられたが故に、"娘よ、お前はよく求めました"と求めをはげますように、求めたことをねぎらい、その

求めに充分に応えようとされるのです。

それ故に、信仰とは、ただまことをもって求めることだけではなく、第二に求め応えて下さる神の側の愛と思いやりがなければなりません。

それはちょうど、手をたたいて音を出すようなものです。片方の手のみでは音は出ません。音は両方の手が共に働いて、はじめて出るものです。

信仰は、私が一生懸命誠実に求める求めと、それを受け入れそれを愛し、それに応答して下さる神のまことが共に合ってこそ生れるものなのです。

聖書が語る信仰という言葉はまことという意味です。それはほかでもなく、求むる人の側のまことと、それに応えて下さる神の側のまこと、とが一つになった状態をいうのです。

ですから、表記のイエスの言葉は〃娘よ　あなたは、まことをもって一生懸念求めましたから、私もまことをもって応えましょう。あなたは救われましたよ〃という意味です。

自からの信仰の姿を省ましょう。

（50・11・9）

3

「イエスは子どもの手を取って〝タリタ　クミ〟と言われた　それは〝少女よ　さあ　起きなさい〟という意味である」　（マルコ福音書5章42節）

一人の少女が死んだ、という知らせがイエスのところにとどけられました。イエスが、そこへ行かれると多くの人が集まり、大声で泣いたり、叫んだりして、騒いでいました。とりわけ死んだ少女の母親は狂人のようになって悲しんでいました。

イエスは、その悲しみで騒いでいるさまをごらんになり、内にはいって、彼らに言われた「なぜ泣き騒いでいるのか。子どもは死んだのではない。眠っているだけである」。とこれを聞いた人々はあざ笑った。しかしイエスは、それには耳をかさず、人々に外に出るようながし、少女の父母を伴い、少女の横たわるベッドのところに行かれた。そして少女の手を取って「少女よ　さあ　起きなさい」（タリタ　クミ）と言われた。すると少女は、すぐ起き上って歩き出しました。

人々はたちまち非常な驚きに打たれました。

人間にとって死別ほど悲しいことはありません。どれほどのお金を支払っても、また、どのような権力者であっても、死はどうすることもできません。わたしたちは、死を前にしてただ泣き悲しみ騒ぐよりほか、何のすべをも持たぬ者です。

しかし、イエスは、その死を死と見ないで〝眠っているだけ〟とされる。眠っている者は再び起すことができます。そうです。イエスには、死人を再び起すことができ、死人を起すかたこそキリスト（救主）であります。

わたしたちは病み、床にふし苦しみ、死ぬ。誰しも離別の悲しみを味う。これがために泣く人々の群をイエスは、深い深い同情の心と思いとで見ておられる。勿論、それくらいのことなれば、私たちにだって出来ないことはない。しかし、イエスは、その人間の悲しみを越えた向う側に生きる世界を見ながら、人の悲しみを見ておられる。だから、人々が少女が死んだと言って泣き悲しんでいるにもかかわらず〝少女は眠っているだけだ〟と言われるのです。

イエスは、少女の死の向うに少女の生を見ておいでになる。言いかえると、イエスは、少女の死をのりこえて、少女の復活（よみがえり）を見ておいでになるのです。

〝タリタ　クミ〟（少女よ　起きなさい）という言葉は、イエスが死せる少女を、復活へと呼び出された言葉でもあります。

結局、人間の離別の悲しさは、この少女がイエスによって呼び出された如く、復活への呼び出しによってしか、いやされないと言えます。

その意味に於ては、この少女のイエスに対する出来ごとの物語りは、私たちに大いなる希望と勇気とを与えるものだ、と申せます。

（50・11・16）

4

「からだを殺しても　魂を殺すことの
できない者どもを恐れるな　むしろ　か

らだも魂も地獄で滅す力のあるかたを
恐れなさい」（マタイ福音書10章28節）

あなたの心のあるところにあなたの魂もある。とイエスは申されたことがあります。たしかに、そのひとの魂は、そのひとが最も価値ありと思っているものの中に在るものです。その心が、つまり、ほんねというものであって、そのひと自身のたっているところであります。

今週のイエスの言葉は、わたしたちが、自分自身にとって何を最も価値ありとし、大切にしなくてはならないか、ということを教えてくれます。それを言いかえるならば、何を最も恐るべきこととしなければならないか、ということでもあります。

イエスは申されます。〃からだを殺しても、魂を殺すことのできない者を恐れるな〃と。これは、からだと魂とのどちらが価値あり、どちらの方が大切なのか、ということを論じているのではありません。つまりからだよりも魂の方が大切であり、価値あるものだ、などと言っているものではありません。

このイエスの言葉は、どこまでも、あなたが最も恐れることは何であり、最も価値あるものは何であるのか!!ということを問うと共に、それが何であるか、ということを教えているのであります。

私たちは、ひょっとすると、魂を殺しても、からだを殺されなければ、それは恐れるに足りない、と思っているのがほんねであるかもしれませんし、その程度の考えで、自分の人生を、歩んでいるのかも知れません。

そう考えるのは、わたしたちが、ひとばかりを見ているからです。この世の眼に見えることがらにのみ、心をひかれて歩んでいる者の心は、食べることや着ること、聞くことや見ること、さわることや感じることの体にかかわることにのみそそがれて、そこに最大の価値を見て、それらを失うことを恐れ、それらを失わしめる者を恐れます。

しかし、ひと以上のおかたを見た者は、自分の魂又は精神の死を恐れ、本当に恐るべきもの、価値あるものの何であるかを知るにいたります。

（50・11・23）

5

「見よ　わたしは　世の終りまで
いつも　あなたがたと共にいるのである」　（マタイ福音書28章20節）

これほど慰めにみちた言葉がどこにあるでしょうか。

愛とは「あなたと共にいる」ということです。

そして、わたしに対するイエスの愛の確かさは、「世の終りまで、いつも共にいる、」といわれるところにあります。

イエスは、わたしのために「ともにいてくださるかた」としてわたしのもとへ来てくださったのです。

「見よ　おとめが　みごもって、男の子を産むであろう。その名は、インマヌエル　と呼ばれるであろう、インマヌエルとは、神われらと共にいます、という意味である」（マタイ1・23）

イエスは、インマヌエルとして来られ、インマヌエルとして生きられ、今もなお、イン

マヌエルとして、わたしたちの人生を共に生きて下さっている。

「共にいてくださる」とは「助けてくださる」とか「慰めてくださる」とか以上の深い安らぎを言うのです。

「助ける」とか「慰める」とかいう行為には、いまだ「何かをしてやる」という態度があり、又「何かをしてもらう」という感じがあります。

しかし、インマヌエルとしてのイエスは、そんな態度や感じなど全くありません。

インマヌエルのイエスは静かに深くわたしが気ずかぬうちに私の悲しみのそばに居て悲しみを悲しそうに見守り下さっている。そのイエスを見出すならば誰しもが、その悲しみをうったえずにはおれなくなる。しかし、インマヌエルのイエスは、黙ってうなずきつつ、悲しむ者の涙をそっとぬぐって下さる。共にとはこのことなのです。

それは、他人とのかかわりで裏らぎられ打ちひしがれて悲しむ子を、自からの胸の中に抱き黙って慰める母親の姿であります。

いつも、いつまでも、このわたしと共にいて下さる方、それがキリストそのものです。

6

「あなたがたは　地の塩である」
（マタイ福音書5章13節）

ものに味をつける、これが塩の役わりです。
すげなくて　思いやりにかけ深みがなく、つき合っていて一向に楽しさを覚えない人のことを〝味もしよっけもない人〟と世間では申します。
人情がわかり、愛がある人は、味のある人です。さしづめイエスは、その味のある人になることを求められる。イエスにある信仰とは、そういう人にせられることを言うのです。
理屈や金品それに名誉などが人の心に先だち、人を動かしてしまうこの世は、まことに無情であります。
愛はけちらかせられ、人情は吹き消されてしまうようなこの地上の人間関係は、殺ばつとして悲しいものです。
これではいけない、と思う。人の心をゆたかにし、人間関係の和を生む者となりなさい。と申されるのが表記のイエスの言葉です。

しかし、わたしたちはひとりでそのような人には仲々なれません。
でもイエスと二人なればなれる。イエスと共にいる人達と共なれば出来る。これが信仰であり、教会であり、その学びの交わりです。
その時、わたしたちは、塩の二つめの役わりとしての腐敗を防ぐという働きを人々の中でなすことができるにちがいありません。

（50・12・14）

7

「互に重荷を負い合いなさい。」
（ガラテヤ書6章2節）

友の苦しみや悲しみを共に苦しみ悲しむこと、これを「互に重荷を負い合う」と言っているのです。
各々が自分のことばかり考えていて、他人のことを少しも考えにいれなければ、人間社

会は成り立ってはゆきません。

自分があっての他人ではなく、他人があっての自分である。他人が不幸になることは自分も不幸になることであり、他人が幸いになることは、自分が幸いになることだ、ということを、人が互に知って、社会生活をしてゆくならば、人間の生活は、どんなに明るくなるでしょうか。

しかし、私たちをとり囲む現実の社会は、互に重荷を負い合うどころか、かえって自分の重負を他人に負わせ、なすりつけて、自分だけが楽をしようとする社会です。

それではいけません。なぜなら結局、楽をしたはずの自分は不幸になり、社会全体がつぶれてしまうからです。

現実の社会が、そのようでなければ、せめて、教会の中の交わりからでも、「互に重荷を負い合う」ものとしてはじめたいものです。

又、あなたの家族の交わりに於てはじめて下さい。

（50・12・21）

8

「主よ　わたしは獄にでも　また死に
至るまでもあなたとご一諸に行く覚悟
です」　（ルカ福音書22章33節）

これはイエスの弟子ペテロが、イエスに対して語った自からの決意であり、覚悟です。しかし、これほどまでのペテロの忠信なる覚悟に対するイエスの対応のさまは、すごく落ちついていらっしゃいます。

「するとイエスは言われた〃ペテロよ　あなたに言っておく、きょう、にわとりが鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」　（ルカ22・34）

ひとは、言葉に左右されます。忠誠を誓う言葉に感動し、ほめられて喜こび、愛をささやかれて感激します。反面けなされて憤り、不評をかって意気消沈します。

しかし、イエスは、そうではありません。ひとの言葉に左右されません。それは、人の言葉を信じないから、という理由によってではなく、ひとの心を、こよなく愛し、こよなく思いやるからによってです。

イエスは、ペテロの言葉を〃ありがとう〃と思って受けとめられたにちがいありません。

しかし、ペテロの覚悟と決意の言葉が、正にペテロの言葉でありつつ、ペテロの言葉でない、ということを見ておいでになるのです。でも、ペテロは今イエスに吐く決意の言葉は正に自分自身の言葉であると信じているのです。イエスは、そのペテロの自己確信を肯定しつつそれがペテロの言葉でなく、又はなくなってしまうことを見ておられる。それを知らないペテロをイエスは、こよなくいとおしみ、やがて、その自己の姿に眼ざめ悲しむペテロを、いたましく思い、そのペテロを大きくつつもうとされるのです。

ここにイエスのまことと愛があるのであります。

今、年頭にあたり、勇ましい言葉は、少なくとも神に向って吐ないでおきたいと思います。それより、ペテロに語りかけられることによって示された、イエスの〃まこと〃に眼をひたすら向けることによって、すべてをおおい、つつんで赦して下さる神の愛のうちに生きつづけたいと願っています。

（51・1・4）

9

「兄弟たちよ　物の考え方では子供
となってはいけない　おとなとなりな
さい」（コリント第一の手紙14章20節）

ものの考えかたでは子供である、ということは、一体どういうことを言うのでしょうか。それは、自分中心にものを考える考えかた、のことであると申せます。

相手の気持や、周囲の状況を見て、自分の言動をおこすのでなく、ただ自分自身のことだけ考え、また自分だけのひとりよがりな考えにもとずいて言動することは思慮浅く、心ない言動だといえましょう。

人が何かに一途になるとき、ときとして、右のような心ない言動を為しても、一向に平気で、さも当然であるような考えになってしまいます。

政治熱心、学問熱心、芸術熱心……熱心はいいのですが、知性の欠如した熱心は、人間の自然の秩序を混乱させてしまいます。

自分のひとりよがりの熱心の論理はとおっても、人間としての自然な論理に反していて

は何もなりません。

最近、中国の周恩来氏が亡くなられましたが、このことに対する日本共産党の態度は、政治熱心がもたらした心ない言動であり、自分のひとりよがりの熱心の論理が、人間としての自然の論理をつぶしてしまった真の知性の欠如、恐るべき独善性を自からさらけ出した、と言わねばなりません。こんな政党が平和を叫んだとて、けっきょくまやかしの平和を口にしているのであって、最も恐ろしいことは、自からは決して、そのことに気づいていないということであります。

このことは、私たちの宗教信仰熱心でも同じことが言えるのであって、故にこそ、イエスは「あなたがたが自分を愛する者を愛したからとて、なんの報いがあろう」と言われ、また「兄弟だけにあいさつをしたからとて、なんのすぐれた事をしているだろうか」と申されるのです。

相互に、大人（おとな）に名実ともになりたいものです。それが成長というものです。

（51・1・18）

10

「わたしたちは　自分自身を宣べ伝えるのでなく　主なるキリスト・イエスを宣べ伝える」

（コリント第二の手紙4章5節）

これはイエスの弟子パウロの言葉です。

ここでよく注意しなくてはならぬことは、パウロ自身とキリスト・イエスが別々に在って、パウロがキリスト・イエスという品物を持って、売り歩いているのではない、ということです。

即ち、キリストか自分かということではありません。パウロにとっては、自分自身を示すことがキリスト・イエスを示すことであり、キリスト・イエスを語ることはパウロ自身を語ることであったのです。

キリストを信じて生きるということは、正にこれ以外のことではありません。

すると人は言うかも知れません「そんな立派な生き方は私に出来ません。」と。

ここで問題にしていることは生き方が立派か否か、ということではありません。キリストを知る、キリストを信ずる、キリストを語るなどということは、その人の生るという生き方により自と出で来るものであって、ことさらに何かで語り示す必要のないものだということです。いいかえると、その人の品性はその人のものごしから、うかがい知れる、といったたぐいのものです。

ですから、パウロは、「わたしたちを　とおしてキリストを知る知識のかおりを至る所に放って下さる」といっています。

キリストを知る知識は語り示すものでなく、その人間が生活している、その所に、かおりとなって、ただようものだ。また、かおりのように、感覚できるようなものだ、と言うのです。

何ら力むことなく、かまえることなく、自然に生きることがキリストのおめぐみと安らぎとを、ただよわせる、そんな人間になりたいですね。

（51・1・25）

11

「主であり師であるこのわたしが
あなたがたの足を洗ったのですから
あなたがたもまた互いに足を洗い合う
べきです」（ヨハネ福音書13章14節）

イエスの当時、召使達は主人の足を洗いました。召使いは主人の足を洗うことを、自分の義務と考え、仕事と割りきって行っていたかも知れません。

しかし、イエスは、自分の弟子達の足を召使いのようにして洗ってやることにより、弟子たちに愛とまことを示し、この愛とまこと、こそが人と人との交わりの基であることを教えられたのであります。

今の時代は、足を洗う者ではなく、足を洗わせる者になるために、人の努力の一切が支払われているように思われます。

子どもの教育教育と盛んにさけばれ、それはさぞ立派なことのように考えられますが、よく考えてみると、何のことはない、足を洗う側にではなく、足を洗ってもらう側になり

たいばかりの子どものエゴイズムにほかならないと申せます。

こんな考えで、教育が考えられているなら、ただ理屈や知識を身につけているだけで、他人に対して愛とまこととをもって本当に交わり得る人間を生み出すことはできません。

「わたしがあなたがたにしたとおりに
あなたがたもするように　わたしは
あなたがたに模範を示したのです」

ヨハネ13・15

与える時与え返されて来るのです。相手の足を洗う時、相手もまた洗い返してくれるようになりましょう。

最初に与えるわざを為す者、これこそイエスに従い、神を信ずる者であります。

人々の間に愛とまことの小石を投げ、愛とまことの波紋をつくって行く者でありたいと思います。

（51・2・8）

12

「イエスは言われた〃わたしはよみがえりであり、命である、わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者はいつまでも死なない。あなたはこれを信じるか〃」

（ヨハネ福音書11章25節）

なんとありがたい言葉であろうか。

若い頃は〃ありがたい〃などと思わなかった。否　思えなかったと言うべきが正しい。しかし、今は、本当にありがたい、と思う。

このイエスの言葉について理屈をつければいくらでもある。しかし、その理屈は、しょせん限りある命に生きる者が語る、こちら側の知恵であって、決して人以上の言葉ではありません。

限りある生命に生きる人間は、それ以上について語る資格など、どこにももちあわせて

はいない。それ以上に語ることは、おこがましいことなのだと思います。そのてんについて、世の勤植物は素直であると思う。彼らは、与えられた限りある生命を一生懸命に生きそして時が来れば、素直にその時に従って枯れ死におもむく。彼らは自からの生きる分については、人間よりはるかに澄んでいると申せます。

イエスが語る言葉は、限りある生命に生きる人間のむこう側に立ち、むこう側について語って下さる。しかも、慈愛深く語って下さる。まことをもって語って下さる。自からの全存在をかけて親しく語って下さる。

「〃あなたはこれを信じますか〃」

イエスのこの語りかけに於て信じることのありがたさ、その偉大さを知らしめられます。信ずることの重さ深さを見せてもらえたように思う。

「よろしくお願いいたします」「どうにも　こうにも御し難きこの身をよろしくお願い申しあげます」としか言うほかない。

（51・2・15）

13

「あなたの信仰が　あなたを救った
のです」
（マタイ福音書9章11節）

自分の知恵や善行や努力で自分を立派にし、人の前のみならず、神の前に於ても正しく生き得ると考え行うことを自力と申します。それに対して、自己の能力の弱きを認め、自分以上の超越者に救われ、その慈悲によりたのもうとすることを他力と言います。

イエスの教えは、自力のようであり他力であり、又反面他力のようであって自力であります。

例えば「求めよ、さらば与えられん」とは、求めるという私たちの努力の必要をすすめると共に、その結果は、求めて得るのでなく、与えられるのだと説いています。即ち、求めは決して得る保証にはならないのであって、得るのは、どこまでも与えて下さる方のお恵みによるのだと申されるのです。

よくよく生というものを考えてみますと、何事も自分が為しているのですが、反面、自

分以外の見えざる大きな手によって動かされているようにも思えます。

決して、じっと祈ってばかりいて、自からは何もしないでいて与えられるものではありません。

自から義しくあろうと努力して生きる時に、それを助け、その誠に答えて下さる確かなお方のあることを知り信じて生きること、これが、信仰であり、あなたの救いとなる、というのが表記のイエスの言葉の意味であると思います。

（51・2・22）

14

「わたしは、世の光である、わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう」

（ヨハネ福音書8章12節）

「命の光をもつ」とは、死を越えた向うに希望をもつということ、つまり永遠の生命又は絶対の平安をもつ、ということです。

よく考えてみると私たちは明日のことがわからぬ身であります。否明日はおろか一寸先といえどもわからぬ身であります。自分自身では、いろいろ計画を未来についてたてますが、それは、どこまでも計画であって、それが実現するという保証はどこにもないのです。つまり一寸先は私たちにとって「やみ」なのです。

「やみ」とは不安ということ、安心がないということです。

不安のたねは出来得るかぎりの知恵をつくして取りのぞかねばなりません。しかし、わたしたちが、いかに知恵をつくしても、来るべき不安を見通すことは出来ません。

健康であった人が突如病にたおれ、一度に不幸のすべてがその人の人生をおおってしまう。朝には笑顔で家を出て行った人が夕には、冷たき死人となって帰って来る、ということは現実であり、すべての人に起り得る可能性であります。その他さまざまな不幸が思いがけずに生じさらに、明日に対する不安は年を老いると共に深くなってまいります。

このようなやみとしての人の世に生きる、わたしたちにイエスは、「わたしは光である」と知らせて下さり「わたしに従ってくる者は　やみのうちを歩くことなく、命の光をもつことができる」と語ってくださる。

これは福ばしき音づれであります。

このイエスによる福音の言葉を、信じ得て生きるものは幸いであると言えます。

信仰とは、この言葉の上に立って生活することであります。

（51・2・29）

15

「おのおの、自分のことばかりでなく、他人のことも考えない」

（ピリピ人への手紙2章4節）

「○○さんはおちたが××さんはうかった」

こんな会話を、あちこちで耳にするのは三月です。それも大学についてではなく中学についてであり、高校についてのことが多く聞く。おちた者は競争にやぶれた敗者の悲しみをかみしめ、うかった者は競争の勝利者の歓びを味う。今一度言うが、これは大人の世界のことではなく小学生や中学生の世界で起っていることがらなのである。

東京では、高校入試にかかわる「偏差値」について、文相がその弊害を認め実態調査にのりだしたという。

入試に於て勝利者となるためには、「他人のことなど一切考えず、ただひたすら自分のみの合格を念じてはげむ」のみである。入試に挑戦する者の世界は、まことにきびしく、すさまじい。しかし、このような競争の世界に幼児期や児童期からどっぷりつけるということは、いやはやもって、人間を悪くこそすれ、決して絶対に良くはしないと言える。

最近の若者は他人のことなど考えず、自分のことばかり考えて行動する、と世の大人は言う。しかし、他人との競争々々で育って来た人間が、どうして他人のことなど考えるという心を持てるだろうか！

勿論人生には相互に競いあう場が必要であり、それを通して人は成長していくという一面はあります。でもそれは「切磋琢磨（せっさたくま）する、つまり知徳学問について相互にはげましあい努力する、ということであって、決して、他人のことなど考えず、自分のことのみ考えていてよい、という競争ではありません。

今日のこの異状を私たちは自分たちの問題として受けとり、ひとり吾が子が競争に勝ったことを歓び、又破れたことをなげくのみで終ってはならぬと思いますし、その犠牲者となる子らを守ってやらねばならぬと思うこのごろです。

（51・3・7）

16

「わたしが来たのは、罪人を招いて
悔い改めさせるためである」
（ルカ福音書5章32節）

〝私のような悪いことをしているものは、教会など行けない〟と、ひとはよくわたくしに言います。すると、そう思っている人々は、教会に集うて礼拝しているものは、すべて何ごとについても善良で、人間として欠けたるところのない人々だと思っているのだろうか。勿論、そこまでは思っていないでしょうが少なくとも、悪いことをしている人には厳しく罰を与えてのぞみ、赦することなく憎むものが教会の説く神だと、その人は思っているようです。

この考えは一面に於てその通りだと言えますが、他の一面に於ては、全く思いちがいをしていると申せます。

確かに、神は悪を憎みます。悪を憎まずして許容する神はも早や神ではありません。

しかし、聖書が教え、教会が説く神、即ちイエスに於て語り示される神は、悪を行う人間を赦す神なのです。

聖書の語る神は、悪を許容する神ではないが、悪を行う人間を赦す神なのです。いうなれば〝悪を憎んで人を憎まず〟の神なのです。

神は、人が悪に喜こんでかかわるものだとは決して思っていられない、理由があり事情がありいきさつがあってのことで、言うなれば、己の思いに反してのことと見ぬかれる「人の罪」とは正にこのことを言うのです。

その意味で「罪」とは人にとって悲しい現実なのであります。誰しも罪の悲しみを背負って生きている、それを「業」と言うのでしょうか。

この悲しむ人間を、神はやさしくつつみ給う、これが「神の愛」であります。イエスは自からの生涯でこの神の愛を生きられ示されたのです。

この神の愛にふれ、つつまれるとき、人の心の中に、「ありがとうございます」という心が生じて来る。これが「悔い改め」のはじまりなのです。

（51・3・21）

17

「あなたがたの量るそのはかりで

自分にも量り与えられる」

（マルコ福音書4章24節）

人を判断するのに、その人の学歴などみていては、とんでもない誤りをおかしてしまうものである。

今日の社会では、学歴などというものは、その人の正味とは余り関係なく、お金で買うような「もの」になってしまった。

人を判断するに最も確かなめやすは、昔も今も、その人の生きざまを見るのにこしたことはない。

人の言葉などというものは全くあてにならない、口先ばかりなどというが、心の中とは全く反対のことを、さも本音のごとく言うのが「ことば」である。だが、その「ことば」なくしては人間のかかわりが成立しない、というのだから、ますますもって、やっかいなことである。

「生きざま」とは一時的な人間の言動のことではない、又部分的な人間の生活の姿ではない。生きざまとは、その人間のすべての生活の姿である。その人間の根性であり、又、その人間がよって立つところの価値基準のことである。

人間は誰しも、自分のもっている価値の基準で、自分以外のものやことがらを量る、金銭を人生の価値基準にもつものは金の無い者は「だめ」で、金のある者は「えらい」と思い込む、社会的な地位を人間の価値基準にもつ者は、社会的地位の高い者ほど「えらい人間」だと思い込んでいる。

人間は各々に自からの価値基準で他を量っている、いうなれば、その量る行為が生きざまと言える。

それ故に、その量る行為を見ていると、その人間がどんな価値基準で生きているか、ということがわかる。

こうした生きざまは、決して一時のポーズでつつみかくせるものではない。

（51・3・28）

18

「わたしを強くして下さるかたによって、何事でもすることができる」
（ピリピ人への手紙4章13節）

これは、パウロの言葉です。彼はひとり強がりを言っているのではなく、事実イエスを救い主（キリスト）と信ずる信仰によって「富にも貧にも、飽くことにも飢えることにも、ありとあらゆる境遇に処し」て来たという実績にもとづいて語っているのです。

パウロはいつも一つの確信を神とのかかわりでもっていました。それは、神を信じて生きている者に、神は必ず常に最善をなし給う、ということです。

ですから、現実のみを見ていると困ったこと、途方にくれてしまうことが多くあっても神の最善の助けを信じて大胆に彼は突き進んだのです。とは申せ、やみくもに唯助けを信じて突き進んだのではありません。むしろ、現実のいろいろな問題に正しく智慧深く対処したし、そのように対処し得る能力、つまり智慧をイエスを救い主（キリスト）と信ずる信仰によって得たのだと申せます。

「神は死んだ者の神ではなく　生きている者の神である」　（マタイ22・32）

とイエスは申されましたが正に今日ここに生きている私の生に深くかかわり、日常の生きるもろもろの問題に対処し得る能力となり、智慧となり給うかたこそ我らが救い主なるイエスに他ならないと申せましょう。

信ずる者には何ごとでも出来る!!と力んで生きる者は盲信であり、智慧なき者のいたずらなる信心であります。

イエスに在る信仰者は、静かでいて深い根強さをもっているものです。

イエスに在る信仰者は、この世のうつろい行くものにまどわされることなく、永遠なる誠を見て、その上に立って自からの歩を進めて行く者です。

パウロは、この信仰を生きた一人の代表的な勇者であります。

（51・4・4）

19

「イエスは山に登り、みこころにかなった者たちを呼び寄せられたので、彼らはみもとにきた。そこで十二人をおたてになった。彼らを自分のそばに置くためであり、さらに宣教につかわし、また悪霊を追い出す権威を持たせるためであった。」

（マルコ福音書3章13節－15節）

人と人との出会いというものは、まことに不思議なものであると思う。それは自から望んで得られるものではない。さりとて、何もしないでいて得るものでもない。

私どもは一生の間に数多くの人々と会うが、そのほとんどの人々が、ただの人生の行きずりの人となってしまう。ところが、どうしてか自からも理由がわからぬままに、共に親しく深く共感し、離るれば安否を想い、会えば心の深くを交わし、喜こびを覚え安らぎを得るような人との出会いがある。友とはそのような人のことを言うのだと思う。

このような人との出会いを私たちは縁（えん）と呼び、人には思いもよらぬゆえに奇縁と表現した。

おそらく、イエスと弟子との出会いも縁である。しかし今週の聖書の言葉は、先ずイエスが「呼び寄せられ」次に「彼らはみもとに来た」とある通り、縁の主体が先ずイエスにあり、それに応じたのが弟子たちであることを語っています。たしかに縁とは人の側からは不思議であり、まさに奇縁以外のなにものでもないと言えるが、しかしイエスの側に立ってみる時、縁とは神の呼びかけに於てはじまっており、人の応答により成立するものだと言える。

私たち教会に集う者は、先ず人と人との出会いを考える前に神と自分の関係についてのこの事実に眼ざめ、そして同じくその関係にある人と自分のの出会いを想うてみることが大切ではなかろうか。その時はじめて自分と友との出会の秘儀が明らかになるように思う

故に、人と人との出会いのみを見ていては、出会いの秘儀は理解できぬばかりでなく、出会いのありがたさがわからないのではないかと思う。

（51・4・11）

20

「あなたがたは　なぜ生きた方を
死人の中にたずねているのか。そのか
たは、ここにはおられない。よみがえ
られたのだ」

（ルカ福音書24章5節）

教会の暦では本日がイエスの復活節であります。十字架につけられたイエスが三日目に墓からよみがえりたもうたというのであります。

わたしたちの信仰は、過去に生き給うたイエスの幻影を追い想いみることで成りたっているのではありませんし、また、イエスが死人から復活したという不思議な出来ごとに驚ろき魅せられて成りたっているのでもありません。

では、わたしたちの信仰は何を根拠にして成りたっているのかと申しますと「イエスは、よみがえられたという出来ごとの意味することがらによって」成りたっているのであります。

イエスの生涯は、人間のまこと、ものごとのまことを語り生き教え示すことでありました。そのまことは、人の知恵でどのように思い考えようが、その思い考えとは全く関係なくものごとの存在の一番深いところにあって、そのものを、そのものたらしめている永遠絶対の秩序（ロゴス）そのもののことであります。イエスご自身は、それを神の支配即ち神の国とお呼びになり、また、神の愛とも言っておいでになりますが、そのまことそのものが、イエスの復活という出来ごとに於て、真実だというまこと性が具体的に語り示されたということが明確に意味づけされているのであります。

「イエスはここにおられない。
よみがえられたのだ。」

この言葉は、わたしたちに生きる希望を与えます。

限られた地上にのみ眼をくばり、はえつくばり、地上にしがみついて生きている私たち人間に神の永遠なる真実に目を開かしめ、でっかい平安と勇気をさづけてくれます。

「それではなんと言おうか。もし、神がわたしたちの味方であるなら、だれが、わたし

たちに敵し得ようか」　（ロマ8・31）

（51・4・18）

21

「心に憂いがあれば　その人をかがませる　しかし　親切な言葉は　その人をたたせる」

（箴言12章25節）

「まるい玉子も切りよで四角　ものも言いよで角が立つ」

たしかに言葉というものは、それを語る者の語り方によって、聞く者の心をなごやかにもし、また、あらあらしくもしてしまうものであります。

「愚かな者のくちびるは争いを起し、その口はむち打たれることを招く」（18・6）

愚かな者とは、自分の語る言葉が聞く相手にどのようにひびくかということを全く考え

ずして語る者のことであります。従って愚かな者とは、自分のことのみ考えて語ってしまうのです。自分だけがあって相手がいない言葉とでも言いましょうか、つまり自分だけが満足すればよいと考えて語っている言葉です。このような人は周囲に不快をまき散らし、争いを起させ友を失います。

「愚かな者の口は自分の滅びとなり、そのくちびるは自分を捕えるわなとなる」（18・7）

しかし、愚かな者は、それすら気づかない、自分は正しく語ったと信じている故に、

「人は自分の愚かさによって道につまづき、かえって心のうちで人と神をうらむ」（19・3）ということになります。

それにひきかえ「親切な言葉は憂いある人をたたせる」のです、親切な言葉とは、相手を思いやって語る言葉です。つまり自分の言葉の中に相手があるとでも言いましょうか、

こういう人は、

「自分の言葉の結ぶ実によって、満ちたり、その口びるの産物によって自から飽きる」

（18・20）

即ち、思いやって語る言葉は相手を豊かな心にするだけでなく、自分自身をも豊かにするのです。

結局、言葉を大切にするということは、相手を大切にする心であると共に、自分自身をも大切にすることだと申せます。

（51・4・25）

22

「すべての道で主を認めよ」

（箴言3章6節）

南禅寺管長の柴山全慶氏の文章に〃花語らず〃という一文がありますが、その序詞に「花は黙って咲き、黙って散って行く　そして再び枝に帰らない。けれども、その一時一処にこの世のすべてを托している。一輪の花の声であり、一枝の花の真である。永遠にほ

ろびぬ生命のよろこびが、悔なくそこに輝いている。」とあります。

右の一文は〃すべての道で主を認めよ〃という箴言の求めに、みごとにこたえたものだと申せます。

「わが子よ、確かな知恵と慎みとを守って、それをあなたの目から離してはならない。」（3・21）

知恵とは読んで字のごとく恵を知るということであります。恵みとは自分の配慮により生れ出たものでなく、どこまでも、自分の配慮を超えて自分以外より配慮されている一切のこと、それに気づくことがほかならぬ知恵ということであります。

その意味で、知恵とは慎みであると言えます。

先の全慶氏の詞には一枝に咲く花そのものが恵を花一ぱいに受け、つつまれ、恵そのものをよろこび、たたえ、あらわし、ものごとの〃いのちそのもの〃に生きている様が語られています。そこには、我れもなく他人もなく、ただ恵みそのもののみがあることを語っています。なんという慎みであり、知恵であることでしょう。

しかし、私たちの日常は、ものごとの表皮のみを見て、損得利害で計算し、慎しみなき知覚でことを論じ、一向に恵を知ろうとはしません。

時は春たけなわ、心気一転眼を大自然に注ぎ、そこにある〃いのちそのもの〃の輝きを深く覚りみたいものです。これぞ「すべての道で主を認める」はじめであります。

（51・5・2）

23

「心の痛める人の前で歌をうたうのは　寒い日に着物を脱ぐようであり
また傷の上に酢をそそぐようだ」。
（箴言25章20節）

右の箴言の言葉は一口に言えば〃相手への思いやりの心〃の必要性を教えているのだと思います。

わたしたちは、ときどき自分の立っている場や状況を忘れてしまって、自分勝手な言動をしてしまいます。

自分が語るその言葉が、それをきく人の心にどのようにひびくかということを、全く考慮に入れないでベラペラと語る愚かさ、又、自分の行動がそこにいる人々に、どのようにうつるかということを考えず、無反省になされる行動の苦々しさ、これこそ愚かさの一言につきるものです。

「さとき者の知恵は、自分の道をわきまえることにあり、愚かな者の愚かは、自分の道を欺くことにある」。（箴言14・8）

先日の朝日新聞に東北大学の学生が、学生部長の教授に三角帽子をかぶせて、公衆のさらしものにしている写真がでていましたが、それを見てさらし者にされた教授の思いもさることながら、それを行った学生たちの愚かさに悲しみを覚えました。ヒステリックな知恵なきそのしぐさは、正常な人間のやることとは思われません。正に〃自分の道を欺くこと〃以外のなにものでもありません。

大人になるということは、〃自分の道をわきまえる〃ということであります。〃自分の道〃とは、状況の中で自分がとるべき言動が人間としての秩序にかなっている、ということです。そして〃人間としての秩序〃とは〃われもひとも〃ということです。われがあってひとがあり、ひとがあってわれがある、という実感的認識をもつことです。

先の学生が、やがて成人した時、かつて自分のやった行為に青春のほろにがき思いでとして赤面しつつ懐しむような大人に成長してくれたらと思いつつ今、私自身の青年時代をにがき想いをもって省りみています。

（51・5・9）

24

「施し散らして　なお富を増す人があり　与えるべきものを惜しん　かえって貧しくなる者がある。」

（箴言11章24節）

〃まかぬ種は生えぬ〃ということわざはわたしたちのすでに知っているところであります。

しかし、ひとは、まかずして果を得ようとします。即ち与ることを知らずして、ただ得ることのみ考え求みるのです「〇〇さんは私に何もしてくれない」と言い、又「ああしてほしい、こうしてほしいが誰もしてくれない」「ああなりたい、こうなりたい」

このような人は、自からまかずして得ようとする　はなはだ不自然なことをしようとしているのです。

イエスは申されました。

「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」　（ヨハネ福音書12・24）

「物惜しみしない者は富み　人を潤す者は自分も潤される」　（11・25）

ことは物質についてのみではありません。心について、精神について、魂について、生